伝承に描かれる交易
—「金田一文庫」と「金田一京助全集」を対象として—

Trade to watch in tradition
—A case study of Kintaichi library and the complete works of Kyosuke Kindaichi—

品　田　早　苗
Sanae SHINADA

1．はじめに

これまで，幾度となく北海道の歴史の再検討がされてきたが，和人が記録した史料をもとした作業がくり返し行なわれたため，アイヌは和人の周辺に位置する存在として，変わることなく歴史のなかに描かれ続けた。それゆえに，和人が記録した史料に代わるものとして，また，北海道の歴史を新しい視点から構築するための史料として，アイヌの伝承を活用する方法が何度も検討されている。しかし，アイヌの伝承では，カムイ（神）がシンタ（ゆりかご）に乗って空を飛ぶ，英雄が敵に体を切り刻まれ骨があちこち露出しても生き返るなど，現実とかけ離れた場面が描かれることも多く，「アイヌの伝承は，現実とかけ離れた空想の産物」とみなされ，一般的な見解とされてきた。けれども，現実とかけ離れた世界が描かれるのは神謡や英雄詞曲に分類される韻文の形式をとる伝承であることが多く，散文説話に分類される伝承では昔のアイヌの人々の日々の営みを描写したと考えられるものも多く存在する。

近年，アイヌの伝承を史料として活用する方法を模索する研究が再び注目されつつある。そこで本論では，和人目線の史料に代わるものとして，また，無文字社会であったアイヌの人々の昔を知る手段として彼らが語り継ぐ伝承に着目する。そして，北海道史のなかでも和人とアイヌ，双方の記録を比較する史資料が多い交易について，伝承に記録される交易の様子を整理し，アイヌの人々の交易に対する歴史認識を明らかにしていく。それとともに，和人が記録した交易の状況と比較して，双方の交易に対する認識の差についても検討する。今回は，アイヌ研究の第一人者である金田一京助の蔵書からアイヌ関連の文献が寄贈されてつくられた國學院大學所有の「金田一文庫」と，『金田一京助全集』を調査対象とする。

2．先行研究

北海道の歴史ははじめ，近世・近代は幕藩体制の社会との関わりを，明治は日本の国家による開拓を中心に構築された。そこではアイヌは弱者という「役割」を与えられ，居住地からの追い出しや生活・文化・慣習の変更の強制，それらに起因する貧困は日本の近代化の過程ではやむを得ないことと考えられていた[1]。つまり，北海道の歴史は「和人（支配者）対アイヌ（被支配者）」という構図のもとに，歴史の中心は和人でアイヌは周辺にいる存在として描かれていたのである。そのゆえに，北海道の歴史は偏った視点で書かれているという批判は常にあり，たびたび北海道史の再検討が試みられてきた。しかし，その作業においても和人が記録した史料が用いられていたため，和人とアイヌの対立的構図は揺るがないものとして歴史の根底に存在し，和人の視点からみた既存の歴史から脱却できずにいた。

1970年代になると，海保嶺夫が近世の北海道史は幕藩体制国家論的視点とアイヌ民族・社会史的視点の二本立てで研究を行なうべきである，と既存の研究と異なる視点を提示した[2]。同時期，北海道の研究領域についても幕藩体制社会における蝦夷地・松前藩の位置付けや本州と蝦夷地を結ぶ流通構造，和人とアイヌの関わり方の具体的解明など，領域も一気に広がった。その過程で，「差別され，収奪される」客体とみなされ続けたアイヌを，歴史の主体として位置づけようとする動きも出始める[3]。しかし，既存の意見に反論するために「歴史を論証するには根拠を史料で示さなければならない」という日本史学界の大前提から離れ，新しい手法を用いて研究する方法を提示できないでいた。

歴史をアイヌ側の視点からみようとする試みは別の手法でも行なわれ，その一つがアイヌの伝承を史料として活用しようとするものである。1953（昭和28）年に知里真志保は，アイヌの伝承で人間の英雄を主人公とする英雄詞曲（ユーカラ）は北海道を本拠とするヤウンクル（「内陸人」，「本州人」，「北海道本島人」）と，大陸の方から海を越えて北海道の日本海岸の中部からオホーツク海岸の各地に橋頭堡を確保して住んだレプンクル（渡来の異民族）との民族的な戦争の物語である，という論を発表した[4]。これに対して発表された代表的な論をいくつか示すと，久保寺逸彦は1969（昭和44）年に，ユーカラを実戦の記録というには空想的要素が強すぎる，近隣民族を連想させるような扮装をした登場人物はいない，地名は架空のものが多い，具体例をあげて証明していないなどの理由をあげ，「ユーカラを単なる民族的英雄説話として，歴史的事実の裏付など認めない金田一博士の説に従いたいと思う」

1）（高倉　1942）など。
2）詳しくは（海保　1974　p.19，海保　1978　p.Ⅰ）を参照のこと。
3）詳しくは（岩崎　1998　p.7）を参照のこと。
4）詳しくは（知里　1954　p.56）を参照のこと。

（久保寺　1969　p.759）と述べた。1974（昭和49）年に海保は，1669（寛文９）年のシャクシャインの蜂起のときのアイヌ社会の状況を「初源的国家の成立時代＝英雄時代」と設定し，アイヌは英雄時代の英雄に率いられた幕藩制国家との戦いの記憶を，ポイヤウンペと異民族との戦いに抽象化して英雄叙事詩「英雄のユーカラ」を生みだした，という論を提示した[5]。1979（昭和54）年に榎森進はユーカラの実証的分析を行ない，８～９世紀のオホーツク文化の人々とアイヌとの戦いを反映したものであろうと述べ，さらに各所からの議論を呼んだ[6]。このように知里から始まった一連の議論は，今も結論は出ていない[7]。このように，アイヌの伝承の史料化は英雄詞曲（ユーカラ）を用いて試みられてきた。

しかし，志賀雪湖は神や英雄が主人公の神謡や英雄詞曲に比べ，人間がおもな主人公である散文説話の資料的価値が社会に広く認知されていないと指摘する。散文説話は，「主人公が一生を振り返り，人生の転機となった重大な事件を中心に置いて，生い立ちから死ぬまでのことを子孫に語り残し，教訓を伝えるというストーリー構成になっている。そこにはアイヌの人々の日々の生活が描かれており，ある時代の社会の様子を伝えている」（志賀　2003　p.23）ので，そのなかにアイヌの人々によって伝えられてきた歴史（認識）が織り込まれているのではないかと推測している[8]。坂田美奈子も散文説話に着目し，「交易と漁場」，「ウイマムと御目見」などを切り口として「口承文学におけるアイヌ－和人関係の形象化とその認識論を読み解く」ことに取り組んでいる（坂田　2011　p.12）。

以上，アイヌ側の視点から歴史をみるためのアイヌの伝承の扱い方についてさまざまな試みが行なわれている。また近年，「口承文芸が史料となりうるかどうか，アイヌ研究の分野ではウェペケレにはあるという方向性に定まりつつある」（佐々木　2005　p.58）という見解が提示され，大学での公開講座とシンポジウムのテーマの一つとして「アイヌの伝承と歴史との関係」が選ばれ講演録がまとめられるなど[9]，伝承が無文字社会時代のアイヌの歴史を記憶する史料となる可能性が，再び指摘され始めている。

３．調査方法と調査対象

１）調査方法

上述の状況を踏まえ，本論ではアイヌ側の視点での歴史を構築するための試みとしてアイ

---

[5] 詳しくは（海保　1974　pp.86-89）を参照のこと。
[6] 詳しくは（榎森　1979）を参照のこと。
[7] 詳しくは（本田編　2010　pp.62-63）を参照のこと。
[8] 詳しくは（志賀　2003　p.15）を参照のこと。
[9] 2004年から2008年にかけて行なわれた講演記録がまとめられたのが，（本田編　2010）である。

ヌの伝承を用いる。調査で用いる伝承は，交易に関する記述のあるものを調査対象である金田一文庫と金田一京助全集のなかから選び，記述をみるための引用資料とする。資料については，志賀が「ジャンルによる和人との関係の描写の違い」を考慮して，散文説話に限定して分析した事例を考慮し[10]，本論でも伝承の形式の違いによる差異についても留意して調査を進める。

調査項目については，交易に関する描写を抜き出したものを，①交易相手・交易地・交易場所，②交易場所への移動手段とその過程，③交易回数，④交易品目，⑤交易の様子，⑥交易の目的，⑦交易をどのようにとらえていたか，の７項目に分けて比較・分析する。そこから，交易に対するアイヌの認識やアイヌと和人の関係を読みとる。さらに，調査項目①～⑤の物理的な項目に関しては，和人が記録した史料を用いて双方の交易に対する認識を比較することとする。

今回，交易に着目したのは，交易が単に物々交換の場，経済活動の場として機能していただけではなく，交易品など有形のものはもちろん，情報・知識・文化・慣習など無形のものも含めさまざまなものが行き来する，アイヌと和人が接触し交流する重要な場の一つであったことと，和人の史料とアイヌの伝承，それぞれの視点から記述されたものをならべて比較することが可能な要素であったからである。

とはいえ，交易に対する基本的な認識はアイヌと和人では大きく異なる。歴史学の基本言説では，和人にとって交易とは経済行為から始まり，次第に「経済的にも武力においても優越的とされる和人の政治権力が優位を占める支配関係に転じ，交易は儀礼化され，統治手段の一環になった」（坂田　2008　p.185）とされる。その一方で，アイヌ語で交易を意味する「ウイマム」は，意味に歴史的変化はほとんどみられず，散文説話には和人によるアイヌの支配やそれに付随する儀礼などを想像させるような描写はほとんどない[11]。和人とアイヌの間にある交易に対する認識の違いを踏まえ，伝承のなかの交易の描写を集めて分析すれば，アイヌ側からみた交易像や交易に対する歴史認識など，今まで語られてきたものとは異なるものがみえてくるであろう。

２）調査対象の紹介　―金田一文庫の来歴など―

研究者は，研究を進めるなかで価値があると認めた文献を手元に置くため，意図せずにテーマをもったコレクションが自然に形成されていくことがある。それらが所有者の退職や

---

[10] 詳しくは（志賀　2003）を参照のこと。
[11] 詳しくは（坂田　2008）参照のこと。

死去など何らかの理由で手放されるとき，売却されて散逸することもあればまとまったコレクションとして大学など研究機関の図書館などに収められ，後進の研究者に貴重な資料を提供することもある。北海道にはその事例の一つと言える，アイヌ研究の第一人者である金田一京助の旧蔵書のうちアイヌ関連の文献が，國學院大學北海道短期大学部（北海道滝川市）の金田一記念文庫の一部として保管されている。

文献の前所有者の金田一は，1882（明治15）年に盛岡に生まれ，東京帝国大学言語学科を1908（明治41）年に卒業し，その翌年から國學院大學で言語学・国語学を教え始めた。その後，彼は1922（大正11）年には教授に，1968（昭和43）年には名誉教授にと60年以上教鞭をとっており，國學院大學とは深いつながりがある。金田一が1971（昭和46）年に89歳で死去したのち，「遺族よりその蔵書の中，アイヌ関係の文献の寄贈を受け」（藤井　1975　p.Ⅰ），國學院大學図書館（東京）が整理して金田一文庫がつくられた。金田一文庫には，一般図書のほかに金田一本人の筆写筆録・校訂書き入りのもの，金田一静江夫人の手写しの辞書，アイヌ語の地名研究の第一人者である山田秀三手書きのノートなどさまざまなものが含まれている。これらの文献は，資料的価値はもちろん，20世紀のアイヌ研究を知るうえで欠かせない歴史的な価値ももつ。

その後，金田一文庫は「アイヌ文化や北海道史の研究でより多くの研究者の方々に活用してもらいたい」（高橋　2011　p.18）という考えから，2002（平成14）年に國學院短期大学部（北海道滝川市）へ移された[12]。その際に，國學院大學（東京）が収集していた北海道に関する史資料など十数点も同時に移動させ，金田一文庫と合わせて新たに金田一記念文庫が開設された。移動先の國學院短期大学部は，1982（昭和57）年に國學院女子短期大学として開学した当初，学生の大半が北海道出身者であったため「出身地域の歴史を少しでも知ってほしい」という大学の方針で当初から道内の市町村史を収集し，現在では道内全域の市町村史を所蔵している[13]。また，この大学は1987（昭和63）年に「アイヌ伝承講座」を，1990（平成２）年に「アイヌ語講座」を開講するなど[14]，道内の大学でも早い時期からアイヌ文化に関する講義を開講する一方で，「チセや丸木船の復元などを行い，積極的にアイヌ文化を教育に取り入れ」（高橋　2011　p.18），アイヌ文化とゆかりの深い大学である。

今回は，アイヌ研究の第一人者である金田一がかつて所有し，かつ，アイヌ関連の貴重な文献が揃っている金田一記念文庫のなかの金田一文庫を対象として調査を進める。

---

12) この大学は，2009（平成21）年に「國學院大學北海道短期大学部」へ改称している。
13) 詳しくは（高橋　2011　p.18）を参照のこと。
14) それぞれの講座は，その後に名称が変更され，現在は「アイヌ伝承」と「アイヌ語」として毎年開講されている。

4．調査・分析

1）金田一文庫の概要

金田一文庫の目録件数は481件で，そのうち日本語文献が423件・外国語文献が58件である。この目録では，シリーズものなどは複数冊を1件としているので，実際の冊数は目録件数より多い。本論では，日本語文献423件を対象に今後調査を進めていく。

まず，文献の出版年代で分類すると，一番古いものは1640年代のもので，1640年代から1849年までのものは約3.8％（16件），1850年代から1960年代までに出版されたものは約74％（313件），年代が特定できないものは約22.2％（94件）である（図1参照）。

次に，文献が扱う地域で分類すると，日本に関するものが約80％を占め，樺太・千島等も含めると全体の約85％になる。次に，日本十進分類法の分類項目を基準に用いて資料を分類すると（表1参照），目録件数の多い順からあげると言語（102件，24.1％），歴史（73件，17.2％），風俗・民俗・民族（59件，13.9％），文学（54件，12.7％），地理・地誌・紀行（43件，10.1％）となった[15]。これは，言語学者であった金田一の蔵書らしい結果と言えよう[16]。

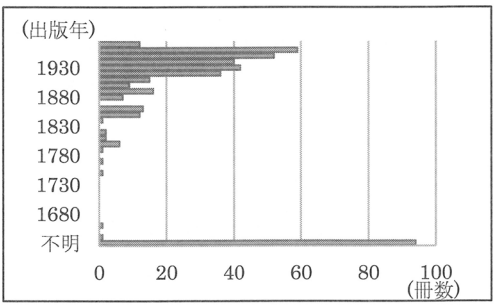

図1　金田一文庫の出版年一覧

表1　日本語文献の図書分類

1次区分	2次区分	目録件数	交易文献の件数(冊数)
総記	事　典	1	0
	博物学	1	0
哲学	宗教・信仰	8	0
歴史	歴　史	73	38(49)
	伝　記	6	1(1)
	考古学	5	2(2)
	地理・地誌・紀行	43	24(36)
	地　名	16	1(1)
社会科学	風俗・民俗・民族	59	13(14)
	神　話	3	0
	伝承・伝説	22	3(3)
	国　語	1	0
	法　律	3	1(1)
	社　会	10	1(1)
自然科学	自　然	3	0
産業	観　光	3	0
芸術	芸　術	10	2(2)
言語	言　語	102	5(5)
文学	文　学	54	2(2)
合　計		423	93(117)

15) 表1中，哲学（哲学・心理学），社会科学（行政），自然科学（地史），産業（産業）の各区分に該当する文献はなかったので項目を削除している。また，金田一文庫は金田一京助の蔵書からアイヌ関連のものを選んだとされているが，神道関連や日本の古代史など分野が異なると思われる文献も複数ある。

16) 金田一文庫には年代が特定できない文献が複数あるが，大半は和装の写本である。ということは，原本の出版年代や模写された時期が特定できれば，文献数の少ない時代のことが分かる可能性も大きい。さらに，写本同士の比較によって新たな情報を得ることもあり，これらの文献を精査するところに新たな一次資料を再発見する可能性を秘めており，今後の研究の課題の一つである。

次に，交易に関する記述の有無で分類すると，条件を満たしたのは目録数423件のうち93件（117冊）となった[17]。その内訳は，多い順から歴史38件（49冊），地理・地誌・紀行24件（36冊），風俗・民俗・民族13件（14冊）である。このうち，交易に関する記述のある伝承は2件（2冊・3話）で，そこに金田一京助全集で交易に関する記述のある伝承4話を追加して計7話（資料一覧は本文末に掲載。資料の出典と形式については表2を参照。）を引用資料とし[18]，そのなかに描かれる交易の記述を集めて比較・分析する。そして，それらと和人の史料（金田一文庫の文献で表1の交易文献に該当するもの，一覧は本文末に掲載。）の記述とも比較する。

表2　引用資料の概要

資料No.	題名	出典	形式
①	（題名なし）　※舟神が主人公	全集	神謡
②	「けちんぼう物語」	全集	散文
③	「イクレシュイの昔話　其一」	全集	散文
④	「六年養われた熊の話」	全集	散文
⑤	（題名なし）　※疱瘡の解説	文庫	散文
⑥	「ツ゜クピタの酋長の物語」	文庫	散文
⑦	「石狩川筋のある酋長の身の上話」	文庫	散文

本論で引用資料とする伝承は，交易が行なわれた場所や品目，商品の交換比率，交易相手，交易圏，ルート，目的など交易に関わる事柄について，断片的であっても具体的な交易の様子がある程度分かるものとした。例えば，交易品と考えられる品名と訳語が書かれているだけでは対象外としている。それは，単語や一文程度の記述では「日本語からの借用語」であることや「交易があった」ことは読みとれても，交易に関する具体的な情報を読みとることは困難であると判断したからである。

2）伝承に描かれる交易　―記述の分析―

それでは，項目ごとに交易に関する記述をみていく。本論では，伝承の形式の違いによる差異を考慮し，神謡である資料①に「（神謡）」と表記して散文説話である資料②～⑦と区別し，形式の違いに留意しつつ一緒に分析することとする。

①交易地・交易場所・交易相手

交易地については，資料①（神謡）は「和国」（p.232）を，資料③は「宗谷」（p.37）・「大層沢山に家の並んでいる部落」（p.37），資料⑤は「Usunkes（今の函館）の方面」（p.357），資料⑥は「石狩川河口」にたくさんの和人がいるところ（p.118），資料⑦は「和人の

[17] 詳しくは，（品田　2017a）を参照のこと。
[18] 引用資料中の旧仮名遣いは，新仮名遣いに書き換えている。また，旧漢字も常用漢字に出来る限り書き換えた。

町」(p.125) をあげている。交易場所については，資料⑥は「会所」(p.119)，資料⑦は「和人の殿のお屋敷」(p.126) をあげている。交易相手については，資料⑥は「和人」(p.119)・「シサム」(p.119)，資料⑦は「和人」(p.125)・「和人の殿」(p.126) をあげている。以上の記述から，交易地・場所・相手いずれも記述があれば和人を指し示し，さらにアイヌが和人の住む町まで出かけて交易している様子がうかがえる。

次に和人の史料をみると，アイヌとの交易地・場所については「会所」や場所請負制で決められた「場所」での交易が書かれている文献がほとんどで，情報が膨大にあるので宗谷の事例だけを提示するが，例えば『松前志』(目録No.185) や『蝦夷が嶋奇観補注』(目録No.218) には大きな交易品のひとつであった青玉が樺太を経て「西北部ソウヤの蝦夷と交易す」(No.185・p.166，No.218・p.176) るものとあり，現代での地域が特定できる宗谷が主要な交易地の一つであったことがわかる。

②移動手段と移動の描写

資料①（神話）では，移動手段として舟（船）をあげ，帰着地を「シシリムカ川の河口の砂浜」(p.232) としている。資料②・④・⑥・⑦では，移動手段に舟（船）をあげている。そのうち舟の形状に関しては，資料⑦に「外洋用の石狩船」(p.126) とある。移動の描写については，資料③では「行って来た人達の話では，浜つづき，海ばたけだけを通って行って」(p.39)，一泊泊まると「翌日は，まだ日が高い内に宗谷へ着く」(p.39) と道順について述べている。資料⑤では，東方の人々が「交易に行っての帰途，60艘の船を連ねてアヨロへ寄港」(p.357) し，「今の膽振国勇払郡鵡川村の沖を走って」(p.358) 十勝地方（または今の静内地域）へ帰ろうとしていた。資料⑥では，主人公は十勝の村から出発し，ある川端から化け物の家を経て川沿いに川下へ移動して「石狩川の河口」(p.119) から和人の町の会所へたどり着いている。資料⑦では，自分の村から川を下り，「石狩川の河口を納める酋長（オッテナ）のところへ行って，海用の船を借り」(p.126)，「海上を漕いで，和人の町へ着いた」(p.126)。交易を終えた後，「そちこちで泊り（マ）を重ねて」(p.127) 石狩川の河口へ着き，川を遡航し自分の村へ帰っている。以上の記述から，資料①（神謡）では移動手段は舟（船）であること，資料②～⑦では徒歩または外洋用の船で移動し，一泊以上しなければいけない地域まで出向いて交易していることが分かる。注目すべき点は，実在する地名や交易地までの経路，所要時間が分かる記述があることで，一部ではあるが伝承のなかでアイヌの人々が進んだ経路をたどることが可能である。

次に和人の史料の記述をみると，舟に関しては『蝦夷國奇観』(目録No.14・写) に「舟図ニ並舟器」という2枚の舟の図があり，その1枚に遠蝦夷がウイマムへ行くための装飾が施されている板綴り舟が描かれている。この舟は，長さ7尋半・幅1尋のポロチャと記され

ており，長さ約11.3〜13.6m・幅約1.5〜1.8mと舟としては大型で[19]，伝承に登場する舟の様子を想像するのを助けるものである。また，『松前志』（目録No.185・pp.145-155）には，福山城下から蝦夷市の主要な村への陸路・海路での移動日数一覧が掲載されている。例えば太平洋側の地域をみると，エトモは陸路で6日・海路で2日程度，シタオイは陸路で7日・海路で2日程度，ウラカハは陸路で11日・海路で4日程度かかるとされ，舟での移動でも数日かかる遠隔地から松前に交易にくる際，アイヌの人々は宿泊しながら移動していた記述と一致する内容である。『松前志』の記述のように会所・場所の所在地・戸数などが記録された史料はほかにも多くある。

③交易回数

交易の回数については，資料⑦で「毎年」（p.125），「度々」（p.125）行っているとしており，交易地まで定期的に行っていた様子がうかがえる。それについて和人の史料では，『北海随筆』で「春毎に産物を船に乗せて来り，領主へ礼をつとむ」（目録No.108・29丁目，No.109・22丁目，No.185・p.64），お目見えには「遠蝦夷は年々には来ず，近蝦夷のみ春毎に来る」（目録No.109・24丁目，No.185・p.65）と述べられており，伝承の内容と一致する。

④交易品

交易品については，資料①（神謡）でアイヌ側は「熊の皮鹿の皮を我が懐いっぱい」（p.232）用意し[20]，交易相手（和人）は「諸々の酒，諸々の穀を夥しく」（p.232）用意している。そのほか，資料⑥では「金の羽根」（p.118），資料⑦では「クマやシカの皮その他」（p.126），「クマの皮，シカの皮，クマの胆，ワシの羽根，乾鮭など」（p.127），「持ち船一ぱい（マ）（マ）の交易品」（p.126），「持ち船の中でも大きな船に，交易品を積めるだけ」（p.126）と述べている。次に交易相手（和人）が用意したものをあげると，資料②では「米だの酒だの反物だのタバコだのを沢山」（p.26），資料④では「酒や米」（p.463），資料⑥では「沢山の太刀（イコロ）や行器（シントコ）など」（p.119），資料⑦では「食器や宝物，調度品など」（p.125）・「漆器類，米，麹，清酒，煙草など」（p.127）を「山の様な船の積荷」（p.127）で用意していた。以上の記述から，資料①（神謡）では双方が交易品を大量に用意しており，資料⑥・⑦ではアイヌ側は熊や鹿の皮のほかに熊の胆，鷲の羽根，乾鮭などを持ち舟いっぱいに用意し，交易相手（和人）側は米，酒，麹，煙草，太刀，行器，漆器類などこちらも舟に山盛りになるほど用意していた様子がうかがえ，神謡と散文説話に差異はほとんどみられない。

---

19) 一尋は日本の慣習的な長さの単位で，5尺（約1.515m）ないし6尺（約1.818m）。
20) 我とは，舟（舟神）のことをさす。

次に和人の史料をみると，交易品目や交換比率に関してはこちらも多くの情報があるので数例をあげるにとどめるが，『北海随筆』（目録No.185，pp.45-46）ではアイヌ側からは鷲，鷹（真羽），粕尾，ウスビウ，鶴，エブリコ，熊皮，熊膽，鯡，昆布，鮭（干鮭，塩引，ひらき，筋子），鹿皮，ねつぷ皮，トドの皮，串貝，煎海鼠，干鱈，鯨（石焼，かい鯨，棒鯨），鮫油，椎茸，白干鮑，臘虎皮，膃肭臍，蝦夷錦，虫巣などを，和人側からは米，酒，糀，塩，煙草，鍋，出刃，刃もの，その他鉄類，木綿，盃，椀類，糸，キセルなどを交易品として用意したことが記録されている。ほかには，アイヌ側からの交易品に鶴（『北海随筆』目録No.109・5-6丁目）が，和人側からの交易品に古着・染木綿（『北海随筆』目録No.108・9丁目）が加わるものもある。上述した品目を比較しただけでも，実際の交易品目がそのまま伝承にも反映しているとみて差し支えないであろう。しかし，交易品の量については，実際には和人の史料の通りそれぞれ決められ，年を追うごとに交換率が低くなっていったので，この点については伝承と史料では異なっている。

⑤交易の様子

資料①（神謡）ではとくに描写はなく，資料②では「町につくと，そこに上陸して，岸の上へテント小屋を張って泊り（マ・マ），（筆者補注：主人公が同行していた）神様のような三人は，土産を持って何処かへ目見えに行った」(p.26)。彼らは，交易品を「沢山持って帰り，小屋の中で一所（マ・マ）に食べたり飲んだりした」(p.26)。資料⑥では和人の住む地域に行くと「わたしのまわりにわいわい集まって来て，わたしの持っていた金の羽根をわれがちに取って，わたしを会所（クワイソ）に伴っていって」(p.119) 代償をくれた。資料⑦では，「和人の町へ着いた。船を浜に曳き上げ」(p.126)，「和人の殿のお屋敷に行って，お目通り（トノコ・オンカミ）し」(p.126) て「酒肴を頂戴して引き下がった」(p.127)。「浜に仮小屋を建てて，その中で殿から頂いて来た酒で，神々を祀り，その夜はそこで泊った（マ・マ）」(p.127)。翌朝，持参した交易品を「殿のお邸に運んでお目にかけ，その二倍にも三倍にも当たるその代わりの品々」(p.127) を頂戴している。以上の記述から，資料②・⑥・⑦では交易品を持って「目見え」に行く，「お目通り」して酒肴をいただく，交易地に着くと和人たちがアイヌを会所へ連れていくなど，歴史に描かれる交易に近い応対をしている様子が描かれている。志賀は，散文説話は「基本的には，交易に行って色々なものを得ることが，何不自由ない生活を実現するための経済活動として描かれており，交易場所にかかわらず交易相手の和人もアイヌとの交易を歓迎し友好的関係が長く続いていると描写されている」(志賀　2003　p.20)，と指摘しており，交易の様子の記述にも同様のことが言えよう。その一方で，アイヌが交易地に着くと和人たちが集まってきて交易品をわれ先に取る，「和人の殿のお屋敷」つまり松前藩士の屋敷と考えられるところへアイヌの人々が直接訪問するなど，今まで歴史で語られてきた枠を越えた行動をする和人や

アイヌたちの様子が描かれ，注目すべき点である。

次に和人の史料をみると，例えば『北海随筆』（目録No.185）には「春毎に産物を船に乗せて来り，（中略）。松前へ著船（ママ）して木屋（こや）へ上り，休足（ママ）の内もいまだ目見すまざる内は外へも出ず。酒もりせず，あきないにも出ずして，穏便也。」（p.64）とあり，『北海随筆』（写）（目録No.108・29-30丁目，No.109・22-23丁目）にも同様の記述がある。これは資料⑦の状況とよく似た記述であり，伝承にも当時の慣習をそのまま反映させたのではないかと考えられる。

⑥交易の目的

資料①（神謡）では，登場人物（人間）が「和国の酒和国の穀を齎らし帰らん日は，大に酒を設けて神々を饗せんとはするぞ」（p.232）と述べ，儀礼をするために酒や穀物を手に入れようと交易に行くとしている。また，資料④には熊送りの「祭を，うんと盛んにするため」（p.460）に交易に行くという記述がある。以上の記述から，それぞれ神々を「送る」儀礼をするために必要な酒や穀物類を手に入れる目的で，交易に向かったと解釈できる。

⑦交易をどのようにとらえていたのか

資料①（神謡）ではとくに描写はなく，資料③では主人公（人間）が「我が村の人達の中には，宗谷へ交易に出かけて，好い物を得て帰る噂があった。自分は，羨ましく思って」（p.39）いる，と述べている。資料⑥では，主人公（人間）が「その頃，アイヌはよく石狩の漁場に働きに行くものだと聞いて，わたしも行きたいもの」（p.117）と石狩に出かけていった。資料⑦では，石狩川上流の村長が下流の村長に「和人の町へ度々交易に行かれて，いやが上にもいい儲けをされている」（p.125）そうで「羨ましい」（p.126）と述べ，また，実際に交易をして「とても言葉ではいい表わされない程大喜びした」（p.127）という。記述が少ないので場所に付属していた漁場に関するものを含めて提示したが，資料③・⑥・⑦では交易にいくと宝物を手に入れられるほどの富や良いものを手に入れられたり，いい儲けができたりしている。その状況はアイヌにとって羨ましいもので，自分もそうなりたいから交易（漁場）へ行きたいという思いがあったことが読みとれる。

5．まとめ

以上，口承文芸のなかに描かれる交易について，７つの項目にわけて分析した。まず，アイヌの伝承と和人の史料の記述を比較した項目５つ（①交易相手・交易地・交易場所，②交易場所への移動手段とその過程，③交易回数，④交易品目，⑤交易の様子）について，共通する状況をまとめると，交易地・場所・相手に関する記述が指し示すのは和人であった。また，和人がアイヌの居住地へ交易に行くのではなく，アイヌが和人の居住地を訪れて交易を

している。その際，アイヌの人々が移動手段として使うのは現実と同じく舟で，陸の人の海と沖の人の海を通過する，帰路あちこち泊まりながら帰ってくる，交易先に着くと，彼らは仮小屋を建てて数日過ごしながら交易を行なうなどの描写もあった。これらのことから，伝承に描かれる交易はアイヌの人々が自由に交易地を行き来して，自ら交易相手を選ぶことができる原初的な交易形態が描かれていると考えられる。また，交易は自分たちの生活圏から離れて遠距離を移動して数日宿泊するなど，一定の日数が必要な行為で，アイヌの人たちにとっても容易には行けないものであったとも考えられる。また，交易品については実際に流通していたものも多く含まれ，またアイヌ・和人双方とも豊富な種類と量を準備しており，対等な交易をしていたと考えられる。

次に，アイヌの人たちが交易の目的や交易自体をどのようにとらえていたのかについてみていくと，資料①（神謡）や資料④（散文説話）で交易の目的が儀礼で使う酒や穀物を手に入れるためと述べている。和人の史料の交易品目をみると，和人からアイヌへ渡った交易品には太刀や行器，漆器類，穀物，絹物などアイヌの伝統的な文化や儀礼のなかで使われる重要な役割をもつものも多い。これらはアイヌの人々が自製できない，または交易でしか手に入れられない品々であり，そのようなものがアイヌ文化のなかに深く浸透していた様子も読みとれる。つまり，交易は彼らが日常生活や儀礼で欠かせない食品や食器類，道具類を手に入れられる貴重な機会であり，それらが必要ならば交易に行くしかないという必然性があり，定期的にアイヌの人たちが交易に行っていたであろう状況が容易に推測できる。

以上のように，伝承に描かれる交易は和人の史料の内容と同様と考えられるものも多く，アイヌの伝承すべてが空想の世界の出来事というわけではなく，空想と現実を織り交ぜた世界観でつくられているのである。ということは，伝承に登場するアイヌの人たちの思いや考えもまた，当時のアイヌの人々の考えや思いを反映したものである可能性も高くなる。例えば，交易をどのようにとらえていたのかをみると，資料③・⑥・⑦には交易に行くことで良いものや儲けを得られ，それは羨ましいことであり自分もそうなりたいと思うもの，として描かれているところから，アイヌの人々は交易自体には良いイメージももち，それが伝承にも反映されたのではないかと考えられる。しかし，伝承にはアイヌの人々が交易先で難題が降りかかったたりひどい目に遭うことも多く[21]，今回の引用資料ではこのような伝承がなかっただけで，この点に関してはさらなる検討が必要である。

以上，交易に関する記述についてアイヌの伝承と和人の記録した史料からそれぞれ抜き出

[21] 志賀は，伝承のなかでアイヌと和人の「友好関係を壊すものとして，交易先での和人の関係したトラブルあるいは呼び出し状による脅迫などが語られており，対等な関係が和人によって壊される設定となっている」（志賀　2003　p.20）とも述べている。

し，内容を比較してきた。今回の引用資料に限定されるが，内容に大きな差はみられなかった。この結果については，今回の引用資料に現実離れしたシーンの描写が多い神謡や英雄詞曲が少なかったのでさらなる検証を要するが，アイヌの伝承が空想の産物だけではなく，昔のアイヌの人々の現実に即した描写も書かれていることをわずかながら証明できたと思う。また，本論では神謡と散文説話のジャンルに起因する差異にも留意したが，大きなものはみられなかった。その作業のなかで発見したことをあげると，散文説話には交易の行き帰りの経路が具体的に描かれ，実在する地名も出され，移動の所要時間が分かる記述が比較的多かった。アイヌの伝承のなかでは珍しい事例ではあるが，もし，交易圏や交易地への経路，所要時間などが不明な地域にこのような伝承があれば，実在する地域の交易圏，交易地への経路，所要時間を推測するヒントにすることも可能ではなかろうか。また，交易先での行動についても，散文説話には部分的ではあるが，目見えに行った，会所へ案内された，和人の殿の屋敷へ行ってお目通りしたなど，現実と重なるような描写もみられる。交易品の種類も多く提示され，交易に対する登場人物の個人的な考えや感想の記述も散文説話のほうが多い。これらは，物語に実際行われていたことを織り混ぜることで物語への共感や話にリアリティを持たせることを狙っていたものであったか意図は証明できないが，人間が主人公になっている散文説話では具体的な描写が多く，昔のアイヌの，とくに一般の人々の日常を知る「史料」にアイヌの伝承を使うことができる可能性を見出した。

もちろん，伝承は歴史そのものが描かれているわけではなく，また，娯楽の世界の物語であるという側面があることは否定できない。しかし上述した通り，実際の交易と伝承のなかに描かれる交易とは遠くかけ離れた内容であるとも言い難い。伝承は，アイヌの人々にとって娯楽であると当時に教訓を学ぶためのツールであり，自分たちの出自や土地の歴史などを子孫に伝える役割をもっている。つまり，伝承ができた当時，さらにアイヌの人々が伝承してきた間の価値観や思いもそのなかに少なからず反映されているはずである。さらに，伝承に描かれた交易において，本論ではアイヌと和人の間に固定化された上下関係や支配関係は見い出せなかった。ということは，アイヌにとって交易は物々交換や経済活動に重きを置くもので，交易相手の和人とは対等な関係であると認識されていた時代もあるのではなかろうか。

今回，日本語訳されたアイヌの伝承を用いたが，文字化されたアイヌ語は執筆者の手を経ることによって語られたときの間合いや抑揚などが排除され，翻訳者の手を経ることによって少なからず訳語や表現の選択の作業などで彼らの主観が入り込む可能性があり，一次資料の音声とは異なる表現になっている可能性にも留意しなければならない。その状況を踏まえたうえで，伝承のなかに隠れるアイヌの人々の価値観，アイヌ側の視点からみた歴史や歴史

認識を探るための参考「史料」として使用できる可能性を秘めていることを，いくつかの事例とともに提示してまとめとする。

おわりに

ここ数年，金田一文庫の調査を進めていくなかで，伝承を利用してアイヌ側の視点で歴史をみる方法と金田一文庫の利用の仕方について考えてきたものを，やっと少し形にすることができた。アイヌの伝承の活用方法については，各分野の研究者によって先行研究が積み重ねられており，本論もその議論の積み重ねの一つとし，今回得た成果と改善点を踏まえて引き続き研究を進めたい。

謝辞

本稿の作成にあたって，北海道教育大学の百瀬響教授には企画当初から全般にわたってご教示，ご指導いただきました。宮城学院女子大学の菊池勇夫教授，札幌国際大学縄文世界遺産研究室の越田賢一郎室長，岩手大学の遠藤匡俊教授，弘前大学の関根達人教授，元余市水産博物館の乾芳宏氏には，資料その他のご教示をいただきました。國學院大學北海道短期大学部図書館の職員の皆様には，金田一文庫の閲覧に際してご配慮をいただきました。また，本研究はJSPS科研費25580150（研究協力者として参加）の助成の一部を使用して行ないました。ここに記して，心から深謝いたします。

〔引用資料一覧（文献初出年月順）〕

資料①　伝承者・採集年不明，題名なし，pp.231-232（金田一京助　1992『金田一京助全集』第7巻アイヌ文学Ⅰ）（初出：1931『国文学踏査』1　大正大学郊北文学会　pp.1-10）

資料②　伝承者・採集年不明，「けちんぼう物語」，pp.22-28（金田一京助全集編集委員会編　1993『金田一京助全集』第8巻アイヌ文学Ⅱ　三省堂）（初出：1931『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』東洋文庫論叢14・第1冊　東洋文庫）

資料③　伝承者・採集年不明，「イクレシュイの昔話　其一」，pp.39-43（金田一京助全集編集委員会編　1993『金田一京助全集』第8巻アイヌ文学Ⅱ　三省堂）（初出：1931『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』東洋文庫論叢14・第1冊　東洋文庫）

資料④　コポアヌ，1919金田一京助筆録，「六年養われた熊の話」，pp.106-116（金田一京助全集編集委員会編　1993『金田一京助全集』第11巻アイヌ文学Ⅴ　三省堂）（初出：金田一京助・知里真志保　1948『りくんべつの翁』世界昔ばなし文庫　彰考書院）

資料⑤　伝承者・採集年不明，題名なし，pp.357-358（知里真志保　1962『分類アイヌ語辞典』第3巻人間篇・常民文化研究68　日本常民文化研究所）

資料⑥　平目カレピア，1936年久保寺逸彦筆録，「ツ゜クピタの酋長の物語」，pp.116-124（久保寺逸彦編著　1972『アイヌの昔話』昔話研究史料叢書別巻　三弥井書店）

資料⑦　平目カレピア，1936年久保寺逸彦筆録，「石狩川筋のある酋長の身の上話」，pp.124-

134（久保寺逸彦編著　1972 『アイヌの昔話』昔話研究史料叢書別巻　三弥井書店）

〔金田一文庫からの引用史料一覧（目録番号順）〕

No.14　秦檍麻呂編　（発行年不明）『蝦夷國奇観』（写）
No.94　古河辰（古松軒）（発行年不明）『東遊雑記』巻18～19（写）
No.108 〔坂倉源次郎〕（発行年不明）『北海随筆』（写）
No.109 〔坂倉源次郎〕（発行年不明）『北海随筆』（写）
No.185　大友喜作校訂・解説　1943 『北海随筆・松前志・東遊記』北門叢書２冊　北光書房

〔引用・参考文献〕

岩﨑奈緒子　1998 『日本近世のアイヌ社会』 校倉書房
榎森進　1979 「ユーカラの歴史的背景に関する一考察―主に邦訳ユーカラを素材に―」『史潮』新５号　弘文堂　pp.67-103
榎森進　1983 『北海道近世史の研究―幕藩体制と蝦夷地―』北方歴史文化叢書　北海道出版企画センター
海保嶺夫　1974 『日本北方史の論理』 雄山閣
海保嶺夫　1978 『幕藩制国家と北海道』 三一書房
久保寺逸彦　1969 「アイヌ文学」『アイヌ民族誌』下　第一法規出版　pp.723-767
國學院大學研究開発推進機構校史・学術資産研究センター編　2015 『國學院大學図書館所蔵　中近世文書書籍目録』 國學院大學研究開発推進機構校史・学術資産研究センター
坂田美奈子　2008 「『ウイマム』と『御目見』にみるふたつの認識論」『アイヌ文化の成立と変容―交易と交流を中心として―』下　岩田書院　pp.185-217
坂田美奈子　2011 『アイヌ口承文学の認識論―歴史の方法としてのアイヌ散文説話―』 御茶の水書房
佐々木利和　2005 「II-一-1-(4)チャランケ岩とサカナニシパ」『アイヌの道』街道の日本史１　吉川弘文館　pp.56-59
志賀雪湖　2003 「アイヌの口承文芸における『歴史』―交易と漁場労働―」『歴史評論』No.639　校倉書房　pp.15-26
品田早苗　2017a 「北海道・東北地方における和人とアイヌの交易に関する文献目録（金田一文庫編）」『北海道・東北を中心とする北方交易圏の理論的枠組み構築のための総合的研究』研究成果報告書（仮）　北海道教育大学（2017年３月印刷予定）
品田早苗　2017b 「口承文芸のなかに描かれるアイヌの交易―金田一文庫と知里真志保文庫を中心に―」『北海道・東北を中心とする北方交易圏の理論的枠組み構築のための総合的研究』研究成果報告書（仮）　北海道教育大学（2017年３月印刷予定）
高倉新一郎　1942 『アイヌ政策史』　日本評論社
高橋由彦　2011 「『資料はどこにあるのか』金田一文庫」『北海道史研究協議会』第88号　北海道史研究協議会　p.18-21
知里真志保　1954 「ユーカラの人々とその生活（二）―北海道の先史時代の人と生活に関する文化史的考察―」『歴史家』第３号　北海道歴史家協議会　pp.33-60
藤井貞文　1975 「序」『金田一文庫目録』 國學院大學図書館　pp. I - II
本田優子編　2010 『伝承から探るアイヌの歴史』研究叢書１　札幌大学附属総合研究所